【316】

氏　名（本籍）	西　原　俊　明（長 崎 県） にし　はら　とし　あき
学 位 の 種 類	博　　士（言 語 学）
学 位 記 番 号	博　乙　第　2131　号
学位授与年月日	平成 17 年 6 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	**DPs in Right Peripheral Positions in English** （英語の右端位置に生ずる限定詞句）

主　査	筑波大学教授		鈴　木　英　一
副　査	筑波大学教授	博士（言語学）	鷲　尾　龍　一
副　査	筑波大学教授		小野塚　裕　視
副　査	筑波大学助教授	Ph. D.（言語学）	柳　田　優　子

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は，次の(1)～(5)に例示されるような，現代英語で名詞句が文末の位置を占める，重量名詞句移動構文，疑似空所化構文，動詞句外部主語存在文，場所句前置構文，主語前置詞句倒置構文という 5 つの構文を取り上げ，このような構文においてなぜ名詞句が文末に生じているか，また，どのような場合にそのような構文が可能であるということを中心に，これらの構文に関する記述的・理論的考察を行い，これらの構文の統語的・意味的特徴を明らかにするとともに，どのようなメカニズムによって派生されるのかを解明することを目的としている。

(1) a. Mary gave everything that he demanded to JoÚ.
　　b. Mary gave to JoÚ [everything that he demanded].　（重量名詞句移動構文）
(2) JoÚ will select me, and Bill will you.　（疑似空所化構文）
(3) There walked into the room a fierce looking tomcat.　（動詞句外部主語存在文）
(4) a. Into the room walked JoÚ.
　　b. In front of her sat her mother.　（場所句前置構文）
(5) Under the bed is a cozy place to hide.　（主語前置詞句構文）

従来の研究では，これらの構文では名詞句が右方移動規則の適用によって文末に生じているという分析と，文末の名詞句は右方移動されたのではなく，当該の名詞句以外の要素が左方移動されるか，または，当該名詞句以外の要素が最初から当該名詞句の左側に生成されるために結果的に当該名詞句が文末の位置を占めるようになっているという分析がなされている。

本論文は，上記五つの構文に関わる様々な言語事実を詳細に観察しながら，これらの二つの分析を含む先行研究を批判的に検討し，生成文法の極小主義の観点からこれら 5 つの構文の統語的･意味的特徴の解明を試み，5 つの構文ではいずれも名詞句が右端の文末の位置に生起しているが，重量名詞句移動構文と疑似空所化構文と動詞句外部主語存在文という三つの構文においては名詞句の右方移動が関与しているが，他方，場所句前置構文と主語前置詞句構文の二つの構文においては名詞句の右方移動が関与していないことを主張している。

本論文では，第 1 章では重量名詞句移動構文，第 2 章では疑似空所化構文，第 3 章では動詞句外部主語存在文，第 4 章では場所句前置構文，第 5 章では主語前置詞句倒置構文を取り上げ，その特徴を詳細に考察し，これら五つの構文には次のような特徴と派生の仕組みがあると主張されている。

1）重量名詞句移動構文と疑似空所化構文と動詞句外部主語存在文には，右方移動である重量名詞句移動が関与し，この移動は focus 素性と格素性の照合のために適用され，これらの構文の統語的特徴は focus 素性と格素性の照合によって説明される。重量名詞句移動構文と疑似空所化構文の場合は対格を付与される名詞句に右方移動が適用され，動詞句外部主語存在文の場合は主格を付与される名詞句に右方移動が適用される。これは，構文によって名詞句の格素性照合に関与する要素が異なるためであり，対格の場合は ϕ 素性に関して一致する他動詞と名詞句の間で照合され，主格の場合は時制要素と名詞句の間で照合される。

2）動詞句外部主語存在文と場所句前置構文と主語前置詞句構文はいずれも基本構造として非対格構造すなわち外層の指定辞の要素を欠いた vP 殻構造をもち，移動に関与する素性が異なることによってそれぞれ異なる構文が派生される。基本構造としての非対格構造は《Agent > Theme > Location》という意味役割の階層構造に従い，派生は Rothstein（1995）が提案する述部原理に従う。構文の派生に関与している素性は，動詞句外部主語存在文では focus 素性と格素性，場所句前置構文では P − 素性と EPP 素性と topic 素性，主語前置詞句構文では P − 素性と EPP 素性であり，これらの素性が移動規則の適用と文の派生に関与している。また，場所句前置構文と主語前置詞句構文は，動詞句外部主語存在文と同じ非対格構造を有しているが，文末の名詞句には右方移動が適用されておらず，文末の名詞句は文末の位置つまり VP の指定辞の位置に元々生成され，その位置に留まっている。

3）動詞句外部主語存在文と場所句前置構文と主語前置詞句構文にはそれぞれ意味的・機能的制約が働いており，動詞句外部主語存在文と場所句前置構文には談話の中心位置への出現と存在・線的移動が，主語前置詞句構文には動詞の両側の二つの要素が同一視できるという意味的・機能的制約が働いている。例えば（6）のように，主語前置詞句構文には主語の位置に生ずる前置詞句に制限がみられる。

（6）a. ? * To Jamaica seems like a good goal for our boat trip.

b. ? * On the lake is splendid.

さらに，本論文では，取り上げられている五つの構文について次のような統語的・意味的特徴と派生の仕組みがあることを明らかにしている。

1）重量名詞句移動構文

重量名詞句移動構文の派生に関与している移動は，非対照的左方移動ではなく，focus 素性と格素性の照合のよる右方移動であり，移動要素が付加された要素と類似した振る舞いを示すので，右方移動の適用後は A'- 位置である付加部の位置に移動していることになる。

さらに，従来は前置詞の補部である名詞句には重量名詞句移動の適用が不可能であると分析されてきたが，適用可能な例があることを指摘し，規則適用の可否には前置詞句と補部の統語的結合の強さが関与するとともに，さらに，（7）に示されるように，意味的結合の強さも関与している。

（7）a. We slept under *t* when we were in Connecticut [a beautiful hand switched quilt that had belonged to George Washington].

b. * We slept under *t* when we were in Connecticut [a marvelous bed that belonged to George Washington].

2）疑似空所化構文

疑似空所化構文では，対格素性を付与される名詞句が空所の後の位置に生起し focus が与えられる。この構文は重量名詞句移動構文と同じ特徴を示すので，重量名詞句移動が適用され，その後で関連する要素に音韻的削除規則が適用されると考えることができる。また，Lasnik（1995）の A- 移動分析ではとらえられない

疑似空所化構文の特徴を指摘し，A'- 移動である右方移動の優位性を明らかにし，さらに，重量名詞句移動構文と同様，前置詞とその補助部の統語的・意味的結合の強さが疑似空所化の適用可能性に関わっていることを明らかにしている。

3）動詞句外部主語存在文

Lumsden（1988）では，動詞句外部主語存在文に生起する動詞がその特徴から非能格動詞であると主張されているが，この構文には行為者指向の副詞が生起できず，結果の二次述部が生起できないことから，この構文が非対格動詞的であると考えられる。

ここで，動詞句外部主語存在文に生ずる動詞が非対格動詞であるなら，（8）のように文末の名詞句以外に動詞に直接後続する名詞句が生起する例が問題となる。

（8） There entered her mind a memory of the feast day.

この構文では通例，名詞句に適用可能な受動化や Wh- 移動や重量名詞句移動が動詞に直接後続する名詞句には適用できないことや promise 構文との類似性が多くみられるという事実に基づいて，（8）の場合に her mind という名詞句には空の前置詞句が先行していると分析している。

また，動詞句外部主語存在文には，名詞句の文末への移動が義務的な場合と随意的な場合があり，この違いには動詞がもつ dynamic 意味素性に密接に関係があることを指摘している。

（9） a. There walked through passport control a well-known actor.

b. * There walked a well-known actor through passport control.

（10）a. There emerged at the meeting several new important facts.

b. There emerged several new important facts at the meeting.

動詞句外部主語存在文には，上記の二つの型に加え，（11）のような受動存在文もある。この受動存在文は，動詞句外部主語存在文と同じ統語的・意味的特徴をもち，その派生には重量名詞句移動が関与していると考えられる。

（11）There were placed on the table several large packages.

受動存在文は，（11）に見られるタイプに加えて be 動詞に後続するタイプも存在する。しかし，名詞句が be 動詞と過去分詞に後続する場合は容認されない。

（12）a. There were several large packages placed on the table.

b. * There were placed several packages on the table.

（11）と（12）の例を説明するためには，（11）では focus 素性と主格の照合のために重量名詞句移動が適用され，他方，（12）では vP と VP の間に Transitivity Phrase を仮定し，Transitivity Phrase の EPP 照合のために名詞句が TrP の指定辞の位置へ移動されるという方法が提案されている。

4）場所句前置構文

文頭の位置を占める前置句は，話題化が適用された要素と同じく振る舞うが，同時に，（13）のように弱い交差現象がみられないことや（14）のように否定極性項目の認可などの点で，主語としての振る舞いをみせる。

（13）a. Who$_i$ appears to his$_i$ mother[t_i to be a genius]?

b. * Into every dog$_i$'s cage its$_i$ owner was looking.

c. Into every dog$_i$'s cage was looking its$_i$ owner.

（14）a. None of the students walked into any of the students.

b. Into none of the classrooms walked any of the students.

c. * Into none of the classrooms any of the students walked.

これらの二重の特徴は，その派生のメカニズム（P- 素性・EPP 素性・topic 素性の要請による移動と素性照合の仕組み）に因ると考えられている。

5）主語前置詞句構文

主語前置詞句構文の場合，移動の対象となる要素は，前置詞句ではなく，前置詞句を内包するϕ素性をもった空の主要部 D をもつ DP である。文頭の要素がϕ素性を有する主語の DP であることは，（15）に示す 7 つの統語テストの結果から支持される。

（15）

	SAI	Short Subject Questioning	Embedded Subject Positions	Wh-Movement	Agreement with Verbs	Controlling PRO subjects	Reduced Form of *be*
PPs in EQPP	OK	OK	OK	OK	OK	OK	OK
PPs in LI	*	*	*	*	*	*	*

このような事実に加えて，主語前置詞句構文の文頭の位置に生起する要素には代名詞化が可能であることも DP であることを示すものである。

（16）Under the bed is a cozy place to hide, but it is a lousy place to keep raw liver.

主語前置詞句構文の文頭の位置に生起する要素が DP を形成し，フェイズをなすという仮定，Chomsky（2001）で仮定されているフェイズ不可侵条件が与えられると，（17）が説明可能になることも指摘している。

（17）* Which bed is [under *t*] a cozy place to hide ?

また，主語前置詞句構文は，Preposing around *be* 構文と異なり，動詞の両側の二つの要素が入れ替えできないという特徴をもつ。これら二つの構文には，主語前置詞句構文の動詞（be 動詞の場合は同定の be 動詞）と Preposing around *be* 構文（叙述の be 動詞）が P- 素性に関する媒介変数において異なることにより，移動要素が異なるという特徴がみられる。すなわち，主語前置詞句構文に生ずる動詞は P- 素性が強く，その照合のために動詞句の補部の位置を占める前置詞句を内包する DP が動詞句の指定辞の位置へ繰り上がり，さらに EPP- 素性の要請で TP の指定辞の位置へ繰り上がる。他方，Preposing around *be* 構文は P- 素性が弱く，動詞句の補部の要素に繰り上げは適用されず，その代わりに，VP の指定辞の要素が EPP- 素性照合のために繰り上がる。

主語前置詞句構文では，動詞の両側の二つの要素が同一視できるかどうかが構文の文法性を左右する。例えば（18）に示すように，文頭の位置に生起する前置詞句（厳密には，空の D を含む DP）は単独では動詞に後続する要素が表す意味と同一視できない場合が存在する。

（18）a. ? * To Jamaica seems like a good goal for our boat trip.

b. ? * On the lake is splendid.

しかしながら，文頭の要素に別の要素が付加される場合や動詞に後続する要素の意味的内容が豊かになる場合は，（19）のように，主語前置詞句構文が容認可能になる。これは，文頭の要素と動詞に後続する要素の意味内容が豊かになり，同一視が可能になるからである。

（19）a. Up to Jamaica seems like a good route（I prefer when driving on this road）.

b. Out on the lake is where you want to be.

動詞に先行する要素と後続する要素が同一視できる場合は，そのような要素が場所・経路・時間・様態・ある種の感情といった意味内容を表すこともあわせて指摘されている。ある種の感情を表す場合は，文頭に生起できる要素は DP に内包される形容詞句である。

（20）Angry / Unwanted is such a terrible way to feel.

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，現代英語の文の右端である文末の位置に名詞句が生じている重量名詞句移動構文，疑似空所化構文，動詞句外部主語存在文，場所句前置構文，主語前置詞句倒置構文という五つの構文を，これまでの先

行研究を網羅的に検討するとともに，各構文を極めて詳細に調査･分析を行っている。これらの構文の文末の名詞句は右方移動規則の適用を受けて派生された可能性があり，これは移動規則が左方移動に限られるという有力な主張と相容れないという点で理論的に大きな問題がある構文であり，また，名詞句が文末に生じているこれらの構文は，要素が左端の文頭の位置に生じているWh－疑問文や話題化構文や関係詞節などと同じく，語順が標準的でなく何らかの移動操作が適用されている可能性があるという点で英語統語論の記述的な面においても極めて興味のなる構文である。このような点で，本論文は言語学的にも英語学的も重要な構文を研究の対象としている。

本論文では，広範囲な言語現象を考察し，説得力のある議論を行うことによって，五つの構文のうち，重量名詞句移動構文，疑似空所化構文，動詞句外部主語存在文という三つの構文には右移動規則が適用されているが，場所句前置構文と主語前置詞構文という二つの構文では，文末の位置を占める名詞句に右方移動が適用されず，名詞句は元の位置に留まっており，他の要素が左方移動されるため結果的に名詞句が右端の位置に生ずることになるという主張を行い，さらに，名詞句が右方移動される三つの構文においても派生方法に違いが見られ，重量名詞句移動構文と疑似空所化構文では対格を付与される名詞句に右方移動が適用され，動詞句外部主語存在文では主格を付与される名詞句に右方移動が適用されると考えられ，このような違いが見られるのは，構文によって名詞句の格素性照合に関与する要素が異なるためであり，対格の場合はϕ素性に関して一致する他動詞と名詞句の間で照合され，主格の場合は時制要素と名詞句の間で照合されるためであるという主張を行い，さらに，類似した基本構造をもつ動詞句外部主語存在文と場所句前置構文と主語前置詞句構文に関しても，派生に関与する素性が異なり，動詞句外部主語存在文ではfocus素性と格素性，場所句前置構文ではP－素性とEPP素性とtopic素性，主語前置詞句構文ではP－素性とEPP素性であるという主張がなされている。これらの主張は，言語理論と英語統語論の両面において大変優れた研究成果であり，高く評価できる。

本論文では，重量名詞句移動構文，疑似空所化構文，動詞句外部主語存在文という三つの構文は，文末の名詞句が右移動規則の適用を受けて派生されると考えられているが，1995年以降の様々な研究において，右方移動規則を認めず，全ての要素の移動は左方移動であると考え，このような考えの下で語順は構造によって決定されるという強力な主張がなされている。本論文では，右方移動規則を認めない理論に対する一定の反論は行っているが，理論に対する反論として単に反例を提示したり反例を用いた議論を組み立てるだけでは不十分であり，右方移動規則を認める理論において語順が構造によってどのように決定されるかに関する対案を提示することによって，左方移動規則のみを認める理論に対する真の反論となり，本論文の主張もよりいっそう強まると考えられる。

本論文は，多少の不十分さが残ると思われるが，重量名詞句移動構文，疑似空所化構文，動詞句外部主語存在文，場所句前置構文，主語前置詞句倒置構文という五つの構文の特徴とその派生方法に関する詳細な分析と説得力のある説明・提案は，言語学・英語学の理論的な面と記述的な面で極めて優れており，この不十分さを補って余りあると判断される。

よって，著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。